

論文の内容の要旨

論文題目 ケアすべきは誰か——責任の分配と教育の役割——

氏 名 佐藤 静

人は依存状態で生まれ、いつも依存と隣り合わせに生きて、依存とともに命の終わりへと向かってゆく。また、重い病や障害とともに生きる人は、つねに依存状態にある。これは人間の生の事実である。そして、依存的な状態にあるものが生き延びていくには誰かのケアを必要とする。われわれは呼吸したり、栄養や水分を摂取したりできなければ死んでしまう。これらは生存の必要条件である。しかし、ケアもまた、それなしでは生き延びることのできない人間の生の必要条件であるといえよう。では、ケアを必要としている人をケアすべきは誰か。これが、本論文を貫く問いである。

この問いのもと、本研究の目的は以下のように示すことができる。第一に、ケアワークの諸特性を分析し定義づけた上で、ケアする責任のあり方の検討を通じて、ケアを公正に分配するための条件について考察を加えることである。第二に、その公正な分配を可能にする条件として、教育はいかなる役割を果たしうるのかを解明する手がかりを提示することである。以上から、ケアする責任の分配のあり方について、教育の役割との関連において一定の解を与えることが本研究の目的である。

社会契約論における公私二元論のもとでケア役割が女性に偏って課せられてきたという第二派フェミニズムの批判が有効であるかぎり、このケアワークという仕事は、それをしたい人に任せてよいとはいえない状況にある。こうしたケアの担い手をめぐる諸問題は、社会的責任に関わる問題であるといえよう。近年「ケアの社会化」が叫ばれているが、その責任のありかたについては十分に議論されているとは言い難い。

また、ケアというものは人間の生の営み全体にかかわる事柄であり、それゆえケアにかんする研究は特定の学問領域の枠に留まらないものである。そのため、本研究においては、教育学のみならず、哲学、倫理学、障害学、看護学、社会学、政治学、法哲学等さまざまな分野におけるケア研究の知見を踏まえた上で、考察を行うこととする。その際に、本論文においては主としてケアへの規範的アプローチをとる。ケアへの実証的な諸研究によって描き出された事実にたいして、「どうあるべきか」という規範の観点から考察を加えることを通じて、ケアの実証理論と規範理論との架橋を試みる。

序章において、教育学研究におけるケア概念の受容について先行研究の整理をしつつ概観し、それらが主として人間の徳性 (virtue) に関わるものとしての「ケア」であり、人間の生を支える世話としての「ケア」という行為は主題として取り上げられてこなかったことを指摘した。また、こうした問題に着目することができたのは、筆者の現場での経験——小学校での教師経験および、障害者の自立生活の介助経験——によるものであったことを述べた。以上より、本研究の核をなす、「ケアすべきは誰か」という問いをたて、それについて検討することの必要性を示した。

第一部では、ケアにまつわる諸問題を明らかにし、その見取り図を提示した。はじめに第一章において、ケア理論における先行研究の整理として、ケアリングの実践研究を適宜参照しつつ、ケアするという行為の諸特性およびそこに生ずる諸問題に関する議論の整理を行った。具体的には、ケアという語の概念について人間の生におけるケアの重要性をふまえ、ケアを必要とするという人間の依存性を人間の条件の一つとして位置づけたうえで、ケアワークという観点からその特性に分析を加えた。

次いで第二章では、こうしたケアワークの社会における位置づけのありかたについて、第二波フェミニズムによる公私二元論批判に検討を加えることを通じて、こうした批判は社会におけるケアワークの公正な分担のありかたを軽視してきた側面を有する点を明らかにした。

そして第三章では、人間の生において必要なケアを提供する側——女性、とりわけ母親の立場——と、される側——障害者の立場——からの異議申し立ての内実について、「脱家族の主張」をめぐる議論に検討を加えた。先行研究において指摘されてきたのは、家族内部のケア関係に内在する愛情から派生した抑圧や暴力の問題である。しかしなが

ら、この主張は障害者運動とりわけ身体障害者を中心とした運動によってなされたものであり、それゆえに家族規範および愛情規範の功罪における「罪」の部分が過度に強調されすぎていた側面を有していた。そこで、中根成寿による知的障害者家族の実証研究に着目し、「脱家族の主張」において否定されたのはあくまでも「当事者の自立を阻む過剰な愛情」であり、よきものとしての愛情もあること、それが知的障害者家族の「ケアへ向かう力」として存在していることを確認した。

これらの検討を通じて、ケアはすべて外部委託すればよいというわけではなく、ケアを「介護力」と「介護関係」にわけ、前者を外部化する方途を探るべきとの方向性が示唆された。また、障害者の自立について、依存という概念との比較考察を行い「依存先の分散としての自立」という解釈を導きだした熊谷晋一郎の論攷も併せて示し、「ケアの社会的分有」および「依存先の分散」を実現するためには誰かがケア役割を担う必要があるが、ではそれは誰が為すべきかとの問いは解消されず未決の問題として残ることを示した。

第二部では、第一部での議論を踏まえ、ケアする責任の分配をめぐる問題に焦点化し、主として倫理学の観点から検討を加えた。第四章では、はじめにケアワークは人のいのちをあずかる仕事であり、それゆえに「独特な道徳的責務」が生じることをその特性の核をなすものとして位置づけた。その上で、ケアする責任および責務としてのプラグマティックな当為がいかにして生じうるのかを考察することを通してケアする責任の分配のあり方に検討を加えた。

具体的には、福祉功利主義者ロバート・グディンによって提唱されたヴァルネラビリティ・モデル、それに対してなされたエヴァ・キティによる批判およびその代案として提示されたドゥーリア・モデルというケア責任の分配論について検討した。キティは、グディンのモデルでは奴隷や誘拐といった正義に反する不適切な関係において生じるケア責任をも正当化してしまうと批判したが、どのような関係であれ緊急時にはケアする責任はその場に居合わせてしまった人に不可避に生じること、それゆえにケアする責務に制約を設けることは原理的に困難であることを明らかにし、グディンの理論を擁護した。しかし、グディンの理論はジェンダー規範にもとづいたケアする能力を暗に前提しているため、ジェンダー平等の観点からは妥当性に欠ける点をあわせて指摘し、その問題点は教育におけるジェンダー平等の観点から再考される必要があることを論じた。

第五章では、現在世界的な問題となっているケアのグローバリゼーションについて考察を行った。その際に、ケアワークの特性の一つである感情労働という側面に注目することで、途上国から先進国へと国境を越えた愛情の移植が途上国の貧しい親子にたいして深刻な道徳的危害を加えていることを、キティの議論を手がかりに提示した。キティ

はこうした問題があくまで国境を越えた移住労働であることから生じているものとみなしていたが、本論においては、ケアワークが同一国内においてなされる場合でも、ケアワークの特性ゆえに同様の問題が生じうることを指摘し、この問題を乗り越えるためにはナンシー・フレイザーの提唱する「普遍的ケア提供者モデル」が理論的には有効であることを論じた。

第六章では、重度重複障害児の父親である最首悟がうみだした「内発的義務」というケアに向かう動機をあらわす概念について検討を行った。先行研究においてこの内発的義務は、娘の誕生とシモーヌ・ヴェーユの義務—権利論を手がかりに生みだされたものとされてきた。しかし、本論文では最首の手記を丹念にたどることを通じて、娘の誕生以前から最首が抱いていた、人間の生産性信仰に疑義を発する問いが、障害ある人々との出会いを通じて深められていき、内発的義務という観念を着想するに至ったことを明らかにした。この内発的義務は、重度重複障害がある実の娘という血縁の親子関係にあるものとの関係を通じてというよりはむしろ、ケアを必要とする人のそばに身を置き、直に触れ、関わることを通じて醸成されるものである。それゆえに、この最首の内発的義務論から次のことが示唆された。それは、内発的義務というケアに向かう動機を醸成するためには、まずはケアに手を染めるべきであるという方向性、ひいてはケアすることを直接経験することを通じた教育の可能性である。

第三部では、ケアの依存先を分散させるために教育が果たしうる役割について検討を加えた。第七章において、まず以下のような社会構想のヴィジョンを示した。人間の依存性を人間であることの条件の一つとして措き、障害ある人であろうとなかろうと、よりよき生を実現できるような社会構想を支持するのであれば、ケアし合う社会を実現する必要がある。そのためには、以下のことが必要である。第一に、ケアについて学ぶことを通じて、実際にケアできるような知としての思慮（フロネーシス）と技能（テクネー）を身につけ、適切なケアをなしうる人となることに教育の目標を置くことである。第二に、学校教育カリキュラムは社会規範としての役割を内包しているため、ケアを教育内容として明示し、そこに規範性を担保することである。その上で、具体的にカリキュラムを構想するにあたって、二人の教育学者——マーティンとノディングズ——が提案するケアのカリキュラム構想について比較検討を行った。そして、カリキュラムを構成する際には、ケアを核とするコアカリキュラムとしてデザインするのではなく、これまで重視されてきた基礎としての 3R's（読み書き計算）とともに、ケアに関わる要素である 3c's（ケアすること、関心を抱くこと、つながること）も同等に位置づけるクロスカリキュラムが有効であることを論じた。

最後に終章において、本研究のまとめを行うとともに、残された課題について示した。